

昔話を子どもに伝えることの教育的意義

Educational Meanings of the Fairy Tale

赤津純子

AKATSU, Junko

日本の昔話のうち、「かちかちやま」を取り上げ、その教育的意義について考察する。「かちかちやま」には、タヌキがお婆さんを婆汁にしてお爺さんに食べさせる場面が出てくる。この部分は、多くの昔話絵本では残酷であるとの理由から曖昧に扱われている。本研究では、保育に携わる保育者、保育者志望の学生、様々な年齢経歴の成人女性という3つの集団の構成員がこの部分について、どのように感じ、またどのように扱いたいと考えるかを調査する。そこから現在の子どもたちにとってのこの昔話の存在意義、教育的意義を検討することを目的とする。

[問題]

1 はじめに

本研究では、日本の昔話の残酷性を子どもたちに伝承することの教育的意義について「かちかちやま」を取り上げて検討することを目的とする。

藤本(2000)は柳田國男の言葉を参考に、昔話を「昔々或るところに」から始まり、トサ、ゲナ、ソウナ、トイウなどの又聞きであることを示す語を付し、最後に「どんとはらい」「これでおしまい」「めでたしめでたし」などで話の終わりを示す一定の形式を持った、伝承された話であるとまとめている。代々語り継がれてきた昔話であるが、これが昔話絵本として子どもたちに提供される時には、子どもたちの発達水準では理解しにくいであろうとの理由から改ざんされて示されることが

ある。「かちかちやま」はその残酷性から本来の形と異なった内容で子どもたちに示されることの多い昔話の一つである。

2 「かちかちやま」について

小澤俊夫の「かちかちやま」の再話絵本(福音館1988)には狸汁として食べられそうになったタヌキが仕返しにお婆さんを婆汁にしてお爺さんに食べさせる場面が出てくる。他の幼児向けの絵本ではこの場面の内容を変えているものが多い。

絵本は子どもの児童文化財としては子どもたちにとっては身近であり、触れる機会が多いものである。具体的に現在入手可能な絵本について内容を見ると、この場面については、タヌキがお婆さんを殺し、お爺さんに狸汁を食べさせる内容の絵本は小澤(1988)のみで、その他はタヌキがお婆さんを殺し、タヌキが

キーワード：昔話、かちかちやま、小澤俊夫、残酷性、質問紙法

Key words : Fairy Tale, Kachikachiyama, OZAWA Toshio, Cruelty, Questionnaire Method

婆汁を食べる内容の絵本（長谷川 田島）、タヌキが老婆さんを殺し、山中に逃げていく内容の絵本（松谷、西本、）（テレビで放送された「まんが日本昔ばなし」（川内）もこの内容である）、タヌキが老婆さんを殴り、山中に逃げていく内容の絵本（平田）というように元の内容を変更している。

婆汁の場面だけではなく、最後のどろぶねに乗ったタヌキが舟諸共川に沈む場面もウサギがタヌキを救い出す内容（平田）、タヌキが自力で這い上がる内容（柿沼）になっている絵本もある。

太宰治の「お伽草子」の中にも「かちかちやま」を題材として描かれた短編がある。冒頭、太宰が娘に防空壕の中で絵本を読んでやるくだりがあるが「このごろの絵本のように、逃げるついでに婆さんを引掻いて怪我させたくらいの事は…」（1972 p 279）というように戦時中流布していた絵本にも婆汁の場面はあまり扱われていなかったことがうかがえる。

小澤はこの昔話を絵本にする時に、「狸の婆汁といわれる前半の部分を入れようと考えました」（1998 p 104）と述べている。彼は、この部分を

- 1 動物同士（人間と動物）の命をめぐる食い合いの物語
- 2 人間が自然の世界を侵略している物語
- 3 究極の仇討ちの物語（相手を食う、あるいは相手にその肉親を食わせる）

と捉えている。そして『「かちかちやま」の話は、日本人と自然との関係の基本的な形とその歴史を語っていることがわかります。そういうなかで、狸を倒したこと、狸を食べようとしたこと、逆に婆さんが殺されたこと、爺さんが知らずに婆汁を食べさせられたことを考えることが大切なのだと思います。ただ

単に、婆さんが殺されてかわいそう、残酷な話、とって片づけることのできない、重要な昔話であることがわかります。』（p 109）「現在の日本の豊かな、そして贅沢な、清潔なくらしをしているなかだと、それは忘れてしまいます。肉を食べてもそんな物はいくらでも手に入るものだとおもう。実はそれは生きていた動物なのだというのを、子どもたちは知るべきだと私は思うのです。自分たちが他の生命に支えられて生きているのだということを知ることは、私は非常に大切なことだと思うのです。」（p 111-112）と述べているように、次世代を担う子どもたちにこの昔話を是非とも伝える必要があると考えている。

一方、松谷は絵本の解説（1967）に「わたしは長い間、この話を好きになれませんでした。なぜきらいかといえば、それはやはり、たぬきがばばあ汁をつくっておじいさんにくわせ、『ながしのしたの骨をみろ。』とって逃げていくあたりの残酷さが、幼い日の印象となつてのこっているからではないかと思えます。…わたしはあえてこのくだりをはぶきました。民話のなかの残酷性については、さまざまの意見があり、わたしはむやみにそのくだりを書きかえたり、あまくする必要はない、むしろそのこと自体がまちがっていると思うのですが、かちかち山では、おばあさんがたぬきによって打ちころされたということだけでよいのではないかと思ったのです。」と書いている。

鶴見（1990）もまた「ばばあ汁というのは、ただ残酷なだけではなく、子どもの心にはむしろ気味わるくうつるときがあります。とって、おばあさんがけがをするだけだったり、生き返ったりするというのでは、後半の徹底したこらしめがなりたちません。それを

思い私は、おばあさんがたたき殺される場面にとどめて、後半にむすびつけました。」(p92-93)と述べている。

西本(1999)は「『かちかちやま』で問題にされるのは、たぬきが、おばあさんをばばあ汁にしてしまうところです。たぬきにすれば、自分がたぬき汁にされるのですから、当然の仕返しであり、おじいさんにとってはたぬきへの憎しみの大きさを表すものであり、いわゆる残酷さを表現するものではありません。しかし、そのことを理解できない子どものために、この本でも、おばあさんが殺されるだけにとどめておきました。昔のひとたちとて、おじいさんに仇討ちをさせずにうさぎに代役をさせているのも、聞き手への配慮があつてのことです。といて、おばあさんを生きえらせたり、ケガだけにとどめておくような再話では昔話としての意味がなくなってしまう。」(p33)と述べている。

これら3名の作家に共通するのはカニバリズムを連想するような内容を子どもたちには伝えたくないということであろう。

3 命の教育についての取り組み

命の教育の必要性が叫ばれるようになって久しい。命の教育とは、生命を慈しむ心を育てること、自然の摂理を教えることの2つの面から考えられる。近年、生命の大切さについての意識が希薄になり、様々な事件が起こっていることなどを背景に、生きる力の育成の一つとしてこの命の教育が重視されるようになってきた。

「幼稚園教育要領」(平成20年3月告示)の中では「生きる力の基礎を育成するよう」(第1章 第2教育課程の編成)基本的な生活習慣の自立を図り(領域健康)、「道徳性の芽生えを

培う」ために、「基本的な生活習慣の形成を図るとともに、幼児が他の幼児とのかかわりの中で他人の存在に気付き、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにし、また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること…」(領域人間関係3内容の取扱い(4))や「規範意識の芽生え」を培い(同(5))「高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人と触れ合い、…生活を通して親や祖父母などの家族の愛情に気付き、家族を大切にしようとする気持ちが育つようにすること」(同(6))「…自然とのかかわりを深めることができるように工夫すること」(領域環境3内容の取扱い(2))「…安全についての理解を深めるようにすること…」(第3章第1 2特に留意する事項(1))「…社会性や豊かな人間性を高めるために障害のある幼児との活動を共にする機会を積極的に設けるよう配慮すること…」(同(3))などの必要性が指摘されている。新要領では平成10年改訂版以上に生きる力の育成に命の教育を通して等、様々な面から取り組むことが強調されているのである。

子どもたちに、生き物に触れさせること、生き物の世話をさせることの効果については、保育現場の調査からも検証されている。

幼稚園での取り組みでは、3歳児と5歳児では死の受けとめ方、認識の仕方が異なること(遠藤他2004)、小学校での取り組みでは、小学4年から5年生にかけて動物飼育に関わった子どもの方が関わらなかった子どもよりも向社会性が高まったこと(中島他2007)などが報告されている。

また、動物との触れ合いについては、高齢者福祉施設、小児病棟などでのアニマルセラピーの効果が報告されている。最近では生物で

はなく、アイボのようなペットロボットも診療に使われている。ペットロボットは生命の維持に関して飼育側は危機感を持ちにくい、清潔である点で無菌状態の必要な病人等にとっては有効である。

「かちかちやま」は動物間(人間とタヌキ)の“生命をめぐる戦いの話”(小澤1998)である。以前の自給自足の生活から食糧は外部調達するようになった現在では、自分が他の動植物の命をもらって生き延びているのだという意識が希薄になっている。そのような時代であるからこそ、このことを忘れずにいること、次世代に伝える役割を昔話は担っている。

4 本調査の目的

人は命あるものを食糧としている、このことは命の教育の中でも重要な側面の一つであると考えられる。

現代の子どもと直接に関わる保育者や、将来保育者を志す学生、成人女子はこのことをどう捉えているのであろうか。子どもたちに昔話の本来の内容を伝えることの可否について、将来、子どもに直接かかわるであろう保育者志望の学生と成人女子、現場の保育士の考え方について調査する。

調査1では、この場面を肯定的に捉えるか、否定的に捉えるか、また、「かちかちやま」を単に仇討ちの物語と解釈するか、食うか食われるかの生存のための戦いの物語として解釈するかなど、生命の連鎖について語られた昔話である「かちかち山」の捉え方について、青年を対象としたアンケート調査を行う。

この再話を自然の摂理、生命の連鎖という視点から捉えることや婆汁の部分や幼児へ伝えることの可否の判断は、家庭での動植物の飼育の経験の有無や子どもに触れる経験の有

無など各人の具体的な生命に関する経験の有無や子どもに対する気遣いができるか、できないかなどによっても異なるのではないかということについて調査する。

調査2では年齢層を広げ、世代別、職業等経験別にこの昔話の評価の相違を検討する。

調査3では実際の保育現場で働く保育士のキャリア、勤続年数の違いから検討する。

[調査]

保育者を志向する現役学生、通信教育課程の在籍する成人女子、現役の保育士を対象とする3調査を行なう。

調査1

目的

将来、子どもに命の大切さを伝える役割を担う保育者になることを目指している大学生はこの昔話をどのように捉えるかを調査する。

方法

対象：保育者養成課程に在籍する学生96名を対象とする。卒業後の進路として、幼稚園教諭、保育士を目指している者が多い。

調査期間：2007年5月

質問紙内容：

- 1) 自分が小学校低学年から高校卒業までに子どもに接した経験の有無
 - ・ 小学校低学年・中学年・高学年、中学校、高校の時期に、それぞれ、0歳、1-2歳、3-5歳の子どもとよく遊んだか、時々遊んだか、ほとんど遊ばなかったかを問う項目、
- 2) 動植物を飼育した経験の有無
 - ・ 飼育した動物の種類、飼育し始めた時期、飼育した植物の種類、飼育し始めた時期を問う項目

昔話を子どもに伝えることの教育的意義

3) 子どもの養育、世話、気遣い

・お風呂に入れるのはこわいか、オムツを替えることを汚いと思うか、見知らない子どもが目前で転んだ時どのように対応するか、電車の座席に座っている時に前に幼い子どもが立った場合どのように対応するか等を問う項目

4) 昔話「かちかちやま」(小澤俊夫再話)

の内容について

あらすじ

感想

- ・登場人物(タヌキ、ウサギ、お爺さん、お婆さん)についてどう捉えているかを自由記述
- ・「かちかちやま」の話を幼児に語ることにについてどう思うかを自由記述

結果・考察

「かちかちやま」の内容と他の変数間で差があるものの結果を示す。

表1はこの昔話の内容を子どもに聴かせる

ことの是非と学生が子どもに触れ合う機会をこれまでに持っていたかとの関係を示している。高校生の時点で子どもとよく遊んだ者と全く遊んだことのない者にはこの話を聴かせたくないと否定的に捉えている者が多いが、時々遊んだ者は子どものためには、積極的ではないが、聴かせた方がよいと考えている者が多い。

表2は乳児の泣き声についての感じ方との関係を示している。泣き声が気にならない者は話の内容を聴かせたくないと思っている者が半数以上で、その次に積極的ではないが聴かせた方がよいと考える者が多くなっている。一方、泣き声をうるさいと感じるものは子どもに話を聴かせたいと考えている。

表3は席を譲ることとの関係である。電車の中で着席している自分の前に子どもが立っていると席を譲ろうと考える者にはこの昔話を聴かせたくない、自分としては賛成できないが、子どもたちのためには教育的に聴かせ

度数 表1 かちかち山を子どもに聴かせることと高校生時0歳児との触れ合いの有無

		高校0歳			合計
		よく遊んだ	時々遊んだ	全く遊んだことはなかった	
かちかち山を子どもに聴かせること	子どもに話を聴かせたい	2	2	14	18
	子どもに話を聴かせたくない	8	2	42	52
	子どものためには話を聴かせた方がよい	4	7	15	26
	合計	14	11	71	96

$\chi^2=9.533$ df=4 P=0.049

度数 表2 かちかち山を子どもに聴かせることと泣き声に対する感情

		泣き声			合計
		気にならない	うるさい	その他	
かちかち山を子どもに聴かせること	子どもに話を聴かせたい	15	3	0	18
	子どもに話を聴かせたくない	50	1	1	52
	子どものためには話を聴かせた方がよい	26	0	0	26
	合計	91	4	1	96

$\chi^2=9.642$ df=4 P=0.047

た方がよいと考える者が多く、積極的に聴かせようという者は少ない。気遣いのできる者（援助行動が取れる者）は婆汁の内容は子どもに伝えたくないと考えている。

表4は過去に飼っていた動物の種類との関係である。イヌ・ネコ・小動物という四足動物を飼っていた者は話を聴かせたくないと否定的に考えている者が多いが、それ以外の生き物を飼育した経験のある者はこの昔話を肯定的に捉え、積極的に聴かせた方がよいと考える者も多くいる。

表5は知っている昔話の数との関係である。

知っている昔話の数が少ない、即ちあまり昔話に親しんでいない者は子どもにこの話を聴かせたくないと考えているが、親しんでいる者は積極的、消極的に話を聴かせる方がよいと思う傾向にある。

調査2

目的

現役の大学生より年齢が上の年代の者のこの昔話の捉え方を調査する。

表3 かちかち山を子どもに聴かせることと席を譲ること

		席を譲ること			合計
		譲る	譲らない	その他	
かちかち山を子どもに聴かせること	子どもに話を聴かせたい	8	6	4	18
	子どもに話を聴かせたくない	45	5	2	52
	子どものためには話を聴かせた方がよい	19	5	2	26
	合計	72	16	8	96

$\chi^2 = 13.226$ $df = 4$ $P = 0.010$

表4 かちかち山を子どもに聴かせることと飼った動物の種類（3種）

		飼った動物の種類（3種）			合計
		イヌ・ネコ・小動物	鳥・魚・虫	なし	
かちかち山を子どもに聴かせること	子どもに話を聴かせたい	7	10	1	18
	子どもに話を聴かせたくない	32	14	5	51
	子どものためには話を聴かせた方がよい	20	3	3	26
	合計	59	27	9	95

$\chi^2 = 10.187$ $df = 4$ $P = 0.037$

表5 かちかち山を子どもに聴かせることと知っている昔話の数

		知っている昔話の数								合計
		1	2	3	4	5	6	7	8	
かちかち山を子どもに聴かせること	子どもに話を聴かせたい	1	1	2	1	3	6	3	1	18
	子どもに話を聴かせたくない	1	8	12	11	5	3	6	3	49
	子どものためには話を聴かせた方がよい	0	1	2	7	4	3	4	5	26
	合計	2	10	16	19	12	12	13	9	93

$\chi^2 = 22.252$ $df = 14$ $P = 0.074$

昔話を子どもに伝えることの教育的意義

方法

対象：通信教育課程に在籍する成人女子62名を対象とする。

調査期間：2008年8月

質問紙内容：

- (1) 年齢
- (2) 職歴、
- (3) 最終学歴
- (4) 子どもの養育・世話・気遣い
- (5) 昔話「かちかちやま」(小澤俊夫再話)について

あらすじ

感想

- ・登場人物(タヌキ、ウサギ、お爺さん、お婆さん)についてどう捉えているかを自由記述
- ・「かちかちやま」の話を幼児に語ることにどう思うかを自由記述

結果・考察

年齢別の話の内容の捉え方については50代

以上の者は全員この昔話の内容を子どもに聴かせるべきだと考えているが、統計的には有意差はない(表6)。

職歴については小学校教諭・幼稚園教諭は肯定的に捉え内容を聴かせる方がよいと考えている者が多いがこれも有意な差ではない(表7)

最終学歴との関係では専門学校卒と大卒が聴かせるべきであると考える者が多く、高卒、短大卒は聴かせるべきではないと否定的な者が多いがこれも統計的には有意な差ではない(表8)。

子どもの世話との関係では抱っこをすることについての感情(表9)で有意差が、オムツを交換することに伴う感情にやや優位な傾向が見られ(表10)、抱っこはこわくない、オムツの汚れが気にならないなど子どもの世話についてのストレスの低い者は内容を聴かせる方がよいと肯定的に捉えている。

その他では年齢と爪を切ることに伴う感情(表11)、お爺さんについての感想(表12)、最

表6 かちかちやま内容と年齢

度数

		年齢												合計
		20代前半	20代後半	30代前半	30代後半	40代前半	40代後半	50代前半	50代後半	60代前半	60代後半	70代前半	70代後半	
かちかちやま内容	肯定	1	2	4	5	2	3	2	4	2	1	1	27	
	否定	4	3	4	6	1	4	3	0	0	0	0	25	
	肯定+否定	1	3	2	2	1	0	1	0	0	0	0	10	
	合計	6	8	10	13	4	7	6	4	2	1	1	62	

表7 かちかちやま内容と職業

度数

		職業								合計
		小学校教師	幼稚園教諭	保育士	教育事務	OL/公務員	アルバイト	無職	その他	
かちかちやま内容	肯定	2	3	3	8	10	0	1	0	27
	否定	1	0	3	5	11	2	3	0	25
	肯定+否定	1	0	1	1	4	1	1	1	10
	合計	4	3	7	14	25	3	5	1	62

表8 かちかちやま内容と最終学歴

度数

		最終学歴				合計
		高卒	短大卒	専門学校卒	大卒	
かちかちやま内容	肯定	4	14	4	5	27
	否定	9	12	1	3	25
	肯定+否定	1	4	1	4	10
	合計	14	30	6	12	62

表9 かちかちやま内容と抱っこに対する感情

度数

		抱っこ			合計
		こわい	こわくない	その他	
かちかちやま内容	肯定	0	24	3	27
	否定	2	19	4	25
	肯定+否定	3	7	0	10
	合計	5	50	7	62

$\chi^2 = 10.200$ $df = 4$ $P = 0.037$

表10 かちかちやま内容とおムツを換えることに伴う感情

度数

		オムツを換える			合計
		気にならない	汚い	その他	
かちかちやま内容	肯定	22	1	4	27
	否定	20	0	5	25
	肯定+否定	8	2	0	10
	合計	50	3	9	62

$\chi^2 = 8.007$ $df = 4$ $P = 0.091$

表11 年齢と爪を切ることに伴う感情

度数

		爪を切る			合計
		こわい	こわくない	その他	
年齢	20代前半	3	3	0	6
	20代後半	7	0	1	8
	30代前半	8	1	1	10
	30代後半	6	6	1	13
	40代前半	2	2	0	4
	40代後半	0	6	1	7
	50代前半	1	5	0	6
	50代後半	0	3	1	4
	60代前半	1	1	0	2
	60代後半	1	0	0	1
	70代以上	1	0	0	1
	合計	30	27	5	62

$\chi^2 = 28.293$ $df = 20$ $P = 0.089$

表12 年齢とお爺さんについての感情

度数

		お爺さん				合計
		肯定	否定	肯定+否定	その他	
年齢	20代前半	4	2	0	0	6
	20代後半	3	2	3	0	8
	30代前半	3	5	1	1	10
	30代後半	4	4	4	1	13
	40代前半	0	4	0	0	4
	40代後半	4	2	0	1	7
	50代前半	3	3	0	0	6
	50代後半	2	1	0	1	4
	60代前半	0	1	1	0	2
	60代後半	0	0	0	1	1
	70代以上	0	0	0	1	1
	合計	23	24	9	6	62

$\chi^2 = 44.056$ $df = 30$ $P = 0.047$

表13 最終学歴と泣き声に対する感情
度数

	泣き声を気にする			合計
	気にならない	うるさい	その他	
最終学歴 高卒	11	2	1	14
短大卒	24	1	5	30
専門学校卒	5	0	1	6
大卒	7	5	0	12
合計	47	8	7	62

$\chi^2=13.720$ df=6 P=0.033

表14 最終学歴とオムツを換えることに伴う感情
度数

	オムツを換える			合計
	気にならない	汚い	その他	
最終学歴 高卒	10	0	4	14
短大卒	26	0	4	30
専門学校卒	6	0	0	6
大卒	8	3	1	12
合計	50	3	9	62

$\chi^2=16.473$ df=6 P=0.011

最終学歴と乳児の泣き声に伴う感情(表13) オムツ交換に伴う感情(表14)間に有意傾向、有意差が見られる。

調査3

目的

現場の保育士たちのこの昔話の捉え方を調査する。

方法

対象：保育士（埼玉県内の私立保育園）19名である。内訳は新人（研修中）5名、勤続年数1年目1名、2年目3名、3年目4名、4年目1名、7年目以上5名である。

調査期間：2008年3月

質問紙内容：

- (1) 勤続年数
- (2) 昔話「かちかちやま」（小澤俊夫再話）について

あらすじ

感想

- ・登場人物（タヌキ、ウサギ、お爺さん、お婆さん）についてどう捉えているかを自由記述
- ・「かちかちやま」の話を幼児に語ることにについてどう思うかを自由記述

結果・考察

婆汁の内容を伝えることについては否定5名、積極的に聴かせたくはないが、子どものためには十分に配慮して聴かせた方がよいと思う者10名、聴かせた方がよいと思う者4名であった。

感想として「今はいろいろな事件があり、子どもたちの影響として考えると悩むが、昔は普通に読んでいた。そこまでに、やって良いこと、悪いこと、また、お話の中の出来事と現実の区別がしっかりつくように育てていれば全く影響はないと思う。ただ、ゲームなどで区別がなくなっている子どもたちも多くなっており、慎重にする必要がある。」「現代の子どもたちには様々な事件が身近にあるため、すぐに関連付けてしまうであろうから、読みかせることはあまり良くないと思う。ただ、昔話を語り続けたいという気持ちはある。」等があった。

考察

子どもに接した経験と昔話の捉え方については、高校生の時に幼い子どもに触れた経験を持つ者は全く触れたことのない者よりも婆汁の内容を幼児に聴かせたくない、聴かせることも大切だがそれにはかなり配慮が必要だ

と考える者が多い ($\chi^2=9.533$ $df=4$ $p<0.5$)。また、幼い子どもに席を譲ろうとする者はしないものよりも婆汁の話を幼児に聴かせたくないと思えるものが多い ($\chi^2=13.266$ $df=4$ $p<0.01$)。これらのことから、子どもの現状をある程度知っている者、気遣いのできる者はあまりこの話の部分子どもには伝えたくないと思っていると見える。

現役の大学生ではこの昔話を子どもに伝えるべきではないと捉えているものが多いが、成人女性では、年齢の高いものほど伝えてよいのではないかと考えている。成人女性では、子どもの世話についてのストレスの低い者は、内容を聴かせる方がよいと肯定的にとらえている。この者たちはある程度、“子どもというもの”の現状を体験的にわかっている者たちと考えられる。

一方、現場の保育士は、現在の子どもたちをめぐる環境の変化を鑑みながら、配慮しながら伝えていくことが必要であると考えている者が多い。

近年の道徳観、社会的規範の遵守が希薄になってきた背景には、ごく初期に子どもにきちんとした規範を教えていないことが挙げられる。子どもの自主性を重んじるといっても基礎となる尺度を持っていない者には無理なことである。まずはしっかりとおとなが見本を示し、善悪、可否など判断基準を示すことから規範意識は始まる。

戦後、社会生活や家族の機能が変化し、これまで家庭が担っていた子どもの養育、教育、高齢者の介護等家族の機能を外部に委託する割合が増加してきた。在宅死よりも病院死が増え、子どもたちが身近で人の臨終に立ち会う機会も減っている。食糧も外部調達がほとんどである。魚は切り身で泳いでいると思っ

ている子どももいるほど、命あるものを我々は食していることさえ感じられない子どもたちが増えている。死についての実体験のない者にはなかなか生命の大切さは理解できない。

伝承する側ではなく、実際の受け取り手である子どもたちはこの物語をどう捉えているであろうか。3歳から5歳児48名について調査したところ(赤津2008)では、絵本を読み終えた後に問うたお婆さんの印象については「タヌキに殺された」「死んだ、」が14名、「逃げるが食べられた」が1名、「いなくなった」が1名、「歩けない」が1名、「お爺さんの手伝いをした」が1名、「お爺さんに怒られた」が3名、「泣いていた」が2名、「逃げた」が1名、「かわいそう」が2名「タヌキに叩かれた」が1名であり、残りの21名は「無回答」である。全体の感想については「楽しかった・面白かった」18名「タヌキがかわいそうだった」7名「びっくりした」1名「無回答」22名であった。この昔話は前半のお婆さんが狸に殺されるまでと、後半のウサギの仇討ちまでの話が長いために絵本を読み終えた時点では、前半の部分の印象より後半の部分の印象が強く、前半の部分はあまり覚えていない者が多いのである。

本調査でも、絵本を読む前にあらすじを問うたところでは、後半のウサギの仇討ち場面のことのみを記述しているものがほとんどであった。本研究の対象者が幼いころに読んだ「かちかちやま」が、婆汁をお爺さんに食わせる内容であったか、ただお婆さんがタヌキに殺されるだけであったかは定かではないが、いずれにしても、前半の部分はあまり印象に残っていない。小澤(2005)は「たぬきはばあさまを杵でうち殺しますが、リアルな描写は一切ありません。実態を抜いて語るのが昔

話です」(p14)と述べている。

この絵本を置いている幼稚園の園長は「残酷さは特に意識せずに、子どもたちに読み聞かせている。」と語っていた。学生の感想にも「昔話の特有の調子で、強調しないように読み手側が気を付ければ気にしないで勧善懲悪の部分だけが心に残ると思う。おとなが気にする程子どもは残酷性を意識していない。」というものがあつた。

あまりに配慮し過ぎることは子どもの命の教育の経験の幅を狭めてしまうことになる。子どもたちが飼育した動物を食するという実践的な授業も行なわれたことはあるが、その動物を食することに必然性がないなどの問題もみられた。絵本はこのような直接的なやり方ではなく、イメージにより子どもたちに伝えることができる。生活の基盤がますます自然から隔たって来ている現代では、「かちかちやま」の本来の伝承内容については、これを全く排除してしまうのではなく、また必ずしもその意味が明確にされる必要もなく、幼いころからさりげなく潜在意識の中に、頭の片隅に入れておくことが大切なのではなかろうか。

引用・参考文献

- 赤津純子 (2008) 命の教育と昔話 日本発達心理学
会第回発表論文集 p 613
- 千葉幹夫 (2001) かちかち山 講談社
- 太宰治 (1972) お伽草子 新潮社
- 遠藤朋子他 (2004) 幼児と小動物のかかわりに
ついでの研究 多摩みどり幼稚園
- 藤本朝己 (2000) 昔話と昔話絵本の世界 日本エ
ディタースクール出版部
- 長谷川摂子 (2004) かちかちやま 岩波書店
- 平田昭吾 (1985) かちかちやま ポプラ社

- 石塚雄康 (1996) 新釈カチカチ山ほか 青雲書房
- 岩本隆茂他 (2001) アニマル・セラピーの理論と実
際 培風館
- 柿沼美浩 (2008) かちかち山 永岡書店
- 川内彩友美 (1997) まんが日本昔ばなし101 講談
社
- レビンソン, B.M. 他 (2002) 子どものためのアニマ
ルセラピー 日本評論社
- 松谷みよ子 (1967) かちかちやま ポプラ社
- メイスン, G.F. (2007) 動物と子どもの関係学—発達
心理から見た動物の意味—
- 水谷章三 (2005) かちかちやま 世界文化社
- 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領
- 中島由香他 (2007) 学年での動物飼育体験が子
どもの動物への共感性および向社会的行動の発達
に与える影響の検討 動物飼育と教育 6
p43-46
- 西本鶏介 (1990) かちかちやま ポプラ社
- おざわとしお (1988) かちかちやま 福音館書店
- 小澤俊夫 (1998) 昔話が語る子どもの姿 古今社
- 小澤俊夫 (2005) 「かちかちやま」の文法 子
どもと昔話第22号 p12-18
- 田島征三 (1987) かちかちやま 三起商行
- 坪田譲治 (2007) 新版 日本のむかし話 2 偕成
社 文庫
- 鶴見正夫 (1990) かちかちやま (日本昔話 2) 偕成
社
- 横山章光 (1996) アニマル・セラピーとは何か 日
本放送出版協会